

キャラクター名  
六道 夜蒼穹 (りくどう よぞら)

— プレイヤー名 —————

防具 値格 装甲 回避 行動 メモ

3年前の出来事だった。自室に上官が晴が使っていた刀を丁寧に包装し僕のもとへ持ってきた。たった一言上官は口にした『彼女は任務を遂行し亡くなつた』と。最初は何を言つてゐるのか分からなかつた。上官はその刀を僕に手渡し、最も丁寧な礼をして去つていった。後に聞いた話だが遺体の処理は見れるものではなかつた為こちらで済ませただそうだ。膝から崩れ落ちようやく今の状況を理解した…いや理解せざるを得ない状況になつた時。涙が永遠に零れ落ちていく。任務から帰つてきたら僕の小説は賞を取つたんだと伝えたかった。一緒に食事をしたりお互いの任務についてしゃべったり、出かけたり。もっともっとやりたい事沢山あつたのに思い出すたびに息が詰まる。

晴は刀の使い手だった。次々ジャームを斬つていく勇ましい女性だった。そんな一生懸命技を磨く姿を見ながら小説を書くのが好きだった。でも稽古場を見てもう誰も居ない。寂しさを紛らわすかのように、見よう見まねで刀を振る。腕前がいいとはお世辞にも言えない。型も悪ければ基礎もなつてないのだろう。

気づけば3年の月日がたつていた。

毎日夜になると彼女が行つていた稽古を行う。

どうだろうか、並の刀使いにはなつてきたのではないかと自惚れる。

彼女は速く、力強い一撃を与えることが出来ていた。それは戦闘面に向いているシンドローム由来の物なのだろう。

僕は情けない事に、ノイマンしか持ち合わせていない。お世辞にも戦えるようなシンドロームのオーバードではない。

でも、僕はこのまま引きこもり小説を書き続け、調査や研究だけの人生を送れば、彼女の残した遺品だけが風化していく。

彼女の大切にしていた武器を見よう見まねで振りかざすべきだと直感し決意した。

僕は僕のシンドロームに誇りをもつて、彼女の様な刀術ではないが貴女が進んでいた道を僕も進もうと思います。